

中国語の中の数字文化

汪 玉林

キーワード：中国語，数字文化

中国語の中の数字は、漢字が長期的に発展する過程で、独自の数字文化を形成して来た。数字は、数量という計数的用途はもとより哲学、社会学、文化学、民族学を含む多様な役割を有している。本論では数字の持つこうした様々な用途を総合して数字文化と呼んでいる。次に、一、二、三、四、五、六、七、八、九について、その内包する文化的要素を述べて見る。

—

(1) 一は中国の伝統的な宗教である道教の教義を示す重要な概念である。それは先秦時代の道家の哲学的内容の範疇であり、天地万物の発生と形成を指す。即ち正常に運行する普遍的な現象の本質であり、その意味は「道」に等しい。『道德経・三十九章』には次のように記載されている。

「天はこの一を得て清く、地はこの一を得て寧らかであり、神はこの一を得て靈妙であり、各はこの一を得て盈ち、万物はこの一を得て生き、諸侯はこの一を得て天下の政治を行なう。」

又、『列子・天瑞』には「生成の始源こそは、一切の形象変化のもとをなすものである。」とある。

(2) 内丹名詞

『脉望』巻八(中国叢書綜録、第二冊)には次のような記載がある。

「一とは道の子なり、道の気一動して水を生ず。故に一は天地の根、万善の長たり。」

道教の教義の中で、一には他の解釈もある。つまり時には丹田の別名として使われる。

一は道教教義の中の重要な哲学的意味を内包し、広範囲にわたって現代生活の中に応用され、人々は「一」を吉祥の教えとしている。

二

『道德経・四十二章』に「道が万物を生成する過程は次の如し。まず道が一元気を生ずる。次にその一元気は分かれて陰・陽の二気となる。次にその陰・陽の二気が感応し合って、第三番目の冲気即ち湧き起る気を生ずる。」と記されている。ここでの二は一と同様に、道教教義の中の重要な概念である。道教教義中の「二実」とは陰・陽を指している。二は即ち陰と陽のことである。天は陽を以って万物を生成し、地は陰を以って万物を生成する。二を表すのに他に“兩”“对”“双”がある。一对や一双は対になっており、すべてが吉祥であり、祝事の意味を表す。従って結婚の日を選ぶ時には偶数の日を選定する。

三

三も道教の教義の中にいくつかの意味がある。具体的には 道・徳・人を指す。形体・神・気を表わす。神・気・精を表わす。天・地・人を表わす。とりわけ天は一となり、地は二となり、人は三となる道教思想が我々に与える影響にはとても深いものがある。日本人の名字である「三田」は中国文化の中では特殊な意味を持っている。三田は『金丹問答』の中で、脳・心・気海（臍下丹田）を指している。脳は「上田」、心は「中田」、気海は「下田」である。漢語では三は時に多数の意味を表わす。

四

四については道教教義の中に「四象」という説がある。『易・系辞』には次のように記されている。“大極生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦。”（大極は一種の尊称である。その大極が動いて陽一を生じ、動極まって陰--を生じる。陰陽の兩儀にまた陰陽を生じて、太陽==・少陰==・少陽==・太陰==の四象が生じる。四象の上にさらに一陽一陰を生じて、乾☰・兌☱・離☲・震☳・巽☴・坎☵・艮☶・坤☷の八卦を生じる。）

四象は金、木、水、火を指すことがある。太陽、太陰、少陽、少陰を指すこともある。又、天、地、日、月を指すこともある。儒家には孝、悌、忠、信を「四徳」と称している。四は我々の生活の中で吉祥、めでたい数とされている。なぜなら対をなすという意味が含まれるからである。“四合院”は建築物の中で吉祥と幸福を合わせるという意味である。“四喜丸子”というような表現は食文化の中における吉祥表現である。

五

五は中国文化の中で重要な位置を示している。五行（金、木、水、火、土）は中国人の思想に深い影響を与えている。戦国時代に形成された陰・陽五行の学説は今日に至るまで、広範囲に應用されている。その範囲は哲学、医学、自然科学の中にも及んでいる。五を以って標準とするところから“五常”（仁、義、礼、智、信）が生まれ、五種の倫理徳徳（父義、母慈、兄友、弟恭、子孝）となる。礼法と徳徳の中では君主と臣下、父と子、兄弟、夫婦、友人の間ではこの五種のかかわりが存在する。仁・義・礼・智・信も「五倫」と称されている。「五徳」は秦漢の道士の中では、金・木・水・火・土を以って基準とされていた。儒家は、温・良・恭・儉・讓を修身の徳徳としていた。「五方」は東・南・西・北・中を指し、「五臓」は脾・肺・腎・肝・心を指し、「五窮」は中国医学で目・舌・口・鼻・耳を指している。「五星」は金・木・水・火・土の五大惑星のことである。「五官」は耳・目・口・鼻・舌、「五色」は青・赤・黄・白・黒、「五味」は酸・苦・甘・咸・辛をそれぞれ指している。

六

六という字は道教では「六根」をいい、これは即ち見・聞・嗅・言・触・知をいう。「見」は眼根、「聞」は耳根、「嗅」は鼻根、「言」は舌根、「触」は身根、「知」は心根という。中国医学では気極、血極、筋極、骨極、肌極、精極を「六極」といい、いずれも疲労から生じる病症である。「六

情」は喜・怒・哀・楽・愛・悪を表わす。「六通」によって表わされる意味は比較的多いが、その中で眼通、耳通、鼻通、口通、身通、心通は身体を深く修練する人の六種類の特種能力を指している。

日常生活の中でよく使用される言い方に“六六大順”という言葉があるが、これは事が順調で吉祥であることを表わしている。

七

七という字はタブーが比較的多い。「七七」は人の死後七日目に行なう行事であり、「七七四十九日」は人が生まれて四十九日で、七魄がすべてととのい、死後四十九日でそれがすべて散るという概念を表わす。仙道の修練には「七禁」があり、それは一に禁口、二に禁目、三に禁耳、四に禁手、五に禁足、六に禁意、七に禁思をいう。よく使われる「七情」は喜・怒・哀・惧・愛・悪・欲を指す。その他に「七曜」があるが、これは太陽と月と木、火、土、金、水の星を指している。中国医学の「七気」とは寒気、熱気、怒気、恚気、喜気、優気、愁気をいう。いずれも病気を引き起こす原因となる。一方、七という数が吉祥の数として尊重されるというケースもある。又印度では「七」に対し強い迷信が存在する。

八

八は中国文化の中で吉祥を表わす数字である。“八卦”“八段錦”“八仙”などすべてが八という字を採用している。広東語の八と発は発音が同じであり、発には“発財”(金持になる)という意味がある。八は生活の中で使われることが非常に多い数字である。たとえば、8月8日8時8分というのは最高の響きを有するし、電話番号やホテルの部屋番号、車のナンバーなど、すべて八という数字が喜ばれる。

“八卦”とは乾、坤、震、巽、坎、艮、離、兌のことである。“八段錦”は健康法の一つで(1)立極(2)召合(3)行持(4)書符(5)祈晴(6)禱雨(7)簾伐(8)造化という8種の型がある。“八仙”には二つの意味があり、ひとつは道教という伝統の中の唐八仙、すなわち天皇真子、洪崖先生、籙堅、赤松子、寧封子、馬師皇、赤将子輿のことである。もうひとつの意味は道教仙人、すなわち鏡漢離、李鉄拐、張果老、曹国舅、呂洞賓、韓湘子、蘭采和、何仙姑である。

九

「九」は中国の伝統文化の中で天を表わしている。崇高なものの象徴であり、無限の貴さを意味する。『説文解字』には“九、陽之變也、象其屈曲究盡之形。”(九は陽の変なり。其の屈曲して究盡する形に象る。)と記されている。

故宮の部屋は9999室あると言われている。又、化粧くぎは一列に九個打たれ、全部で九列になる。中国の古代においては、「九洲」が設置されていた。九洲とは冀、豫、雍、揚、兗、徐、梁、青、荊のことである。

「九大」とは風、雲、雷、海、火、日、地、天、空であり、「九徳」は忠、信、敬、剛、柔、和、固、真、順である。

